津高同窓会報

発行所
津市新町3丁目1－1
津高等学校
同窓会事務局

赫き心の歌声ひゞけ

＝昭和五十一年度総会の記録＝

昭和五十一年度津高同窓会総会は、八月第一日曜たる一日午後一時半より、津市丸の内、日生ビル9階ホールにおいて催された。集える会員僅か百六十九名に過ぎさりしとはいえ、そは、いずれも永劫尽きざる学灯の影響う思いは同じはらからたち、熱き思いを胸に秘め、さための灯あかくしてこの世のえにし語らいつ、議事、歓談に、玉殿に、赫き心の熱唱に終始和気藹々と時を移し、思い濃くも懐かしき夏の日のひとときを過ごしたのであった。

◇　◇　◇

遅い梅雨明け間もなきこの日、さすがに蒸し暑けれど、上天気。既に開会半刻ほど前には、往年の健児や乙女らが会場のそこかしこに友愛みてる輪をつくり、歓談の花を咲かされていた。

定刻開会。進行係は本会実行委員長たる冨島利男氏（S20卒）。まず大蔵治郎副会長（S10卒）より開会の辞あり、次いで大森四郎氏（T12卒）をリーダーに旧制津中校歌を、伊藤ミヤ子氏（S15卒）をリーダーに旧制津高女校歌を、最後に岩子圭佑氏（S30卒）をリーダーに津高校歌を、それぞれの卒業当時の誇り高く熱唱。津高校歌の中の「源遠く出でる　古き流れの　ここに合い……」なる歌詞がまこと実感として胸を打ち、伝統の重みひしひしと身に迫る一瞬ではある。

次に大蔵治郎会長（T13卒）の挨拶。

これにあって同会長は、本総会に五十年度より東京同窓会会長となられし木村俊夫氏（T15卒、衆議院議員、元外務大臣）が ご来場くだされ、とての欣びを述べられ、会員を激励し進行に関し、間違いによる迷惑をおかけせしこと、これに対する会員諸氏のご協力に深甚の謝意を表したきこと、小竹惟校長と退職のこと、国府直美新校長（S10卒）ご着任のこと、最後に津高創立百周年記念事業に関し、資料館、校史編纂、特別委員会設置、特別会費立、組部事項決定に関する件等につき詳細なる説明ならびに提案されて、このうち特別委員会については後に議題として提案したき旨申渡され、会員諸氏の益々ご幸と健康を祈るとて、これが辞を結ばれた。次には国府直美津高校長の挨拶。これにあって同校長は、ご自身の母校に校長として勤務することになり欣び、それと同時に責任の重大性を痛感する旨述べられし上、学校経営に関すること、一他と競争しといわんよりは自己百身を磨くことの肝要性、津高を卒業してほんとうによかったと生徒に思わせるような教育を行ないたきこと、新制高と旧制津中とは同じでないとの考えあるたれども例の学校火事の際、そのような声は消えしこと、同窓会に対する愛着心などにつき話され、後、たとい制度は変りても後輩に対する先輩の指導、引立を宜しくとて、これが辞を結ばれた。

次いで前述の木村俊夫代議士より懇ろなる挨拶ありて後、吉原一真三重県副知事（S8卒）、岡村初博津市長（S15卒）の挨拶ありて、いよいよ議事に入る。議事に先立ち、昨年総会の名誉会長たりし土倉豊氏（S3卒）がご回もまた議長に選ぶ。かくて、この名誉会長の手により議事はあたかも水の流れるがごとく極めてスムーズに進行する。まず松島弥二八氏（S23卒）より五十年度事業報告ならびに会計報告がなされ、次に三宅吉也氏（S23卒）による会計監査報告。次いで鳥羽登氏（S29卒）より五十一年度事業計画の説明ならびに五十一年度予算案の説明あり、一同これまた拍手もってこれを承認し、ここに予算成立。この後いよいよ前述の津高創立百周年記念事業に関する議事に入りたるも、会長より提案せる次の諸事項を満場一致にて喜びに添く承認。

1、記念事業特別委員会を設けること。
2、同特別会計を設けること。
3、細部については臨時総会を開くことなく、同窓会の常任委員会に一任すること。

かくして午後一時三十分、議事はとこに長く終了。かくも案件がスムーズに決定せるるは、名議長によりしもさることながら固き友情の厚き信頼の情に由るところ多大ならん。感謝感謝。

次はいよいよ懇親会。これが進行係は真弓浩氏（S26卒）。まず阿部喜兵衛副会長（S4卒）よりの挨拶あり て後、超大先輩、八十四才の田中栄一氏（M45卒）の音頭にて一同嬉々と乾杯。そのあとは美酒玉杯を共にして、健児や乙女の昔に帰り、尽きる思いのよもやま話。酔うほどに、飲むほどに、熱気はいよいよ高まりて、やがて手拍子乱れ飛び、賓歌、応援歌の爆裂。

かくして、遂に尽るるこなお早

総会風景

皆さん、お変りありませんか。日頃は同窓会のために格別のご後援を賜り、厚く感謝しております。

事件に明け事件に暮れた一年でありましたが、同窓会はなんなる嵐をよそに、極めて順調に歩みをつづけております。

先ず、同窓会を陰ながら皆さんのご協力のおかげで、当初の予想を上廻る配布状況で、この大事業が有意義だったことをうれしくおもいます。まだご入手でない方は、残部が五、六百冊津高同窓会事務局にありますから、金二千五百円（郵送料共）でお買求めの程お願い申し上げます。

同窓会総会も恒例八月第一日曜日、盛会裡に津高、津中、県女の音午後三時十分過ぎ、景気よくして懇親たる早稲田の歌の快男子西村修一君（S49卒）の応援歌はじまりの素晴らしき音頭にて一同唱ら

（津高同窓会係　市川記）

ご挨拶

副会長　阿部喜兵衛（S4卒）

歌を合唱することが出来ました。

し、東京、京都、大阪、松阪各支部同窓会も、それぞれ特色のある会合を持たれました。

昨年一月二十一日（土）には、各位のご要望により、三重一中、津中有志懇談会を、乙部の生方で催し、参加者約九十名、思い出と思い出の「恋」に花を咲かせました。

が、これは三重桜の同窓会に相当するもので、若年から社年にかけてのつどいですが、その時と考えたのは、津高になってから諸君も、二十年代、三十年代、四十年代ぐらいに区切り会合を持たれたらどうかということです。これはひいては、全体としての津高同窓会にも活を入れてくれるでしょう。若い力が同窓会の中心勢力となっていったら、一大進歩が期待できるのではないでしょうか。

母校はやがて創立百周年を迎えます。長い伝統の上にあぐらをかくことなく、常に新しく伸び、学業に運動に優秀な成果をおさめてゆくとう頼張っている後輩のためにも、皆さんのご自愛と活躍を祈りご挨拶といたします。

最近卒業生進路状況

五十一年三月卒業生の進路状況をお知らせします。

卒業数六三名（男四〇七、女二三五）のうち進学四一名（男三二五、女九〇）進学待ち〇（男一七八、女二七）就職八名（男二、女五）家事従事四名（男一、女三）です。

主な大学への合格者数を一部お伝えしますと、東大に七名（うち浪人三）京大に一九名（うち浪人九）阪大に九名（うち浪人七）名古大に三名（うち浪人一五）地元の三重大に七二（うち浪人一四）名古大に二名（うち浪人七）早稲田大に六名（うち浪人二）慶応大に五名（うち浪人二）同志社大に六九名（うち浪人四二）立命館大に六名（うち浪人四二）等です。

次に就職については、例年同様少なく、その就職先は国家公務員兵庫県庁、セントラル硝子株式会社等でした。

五十一年三月卒業生で、就職希望者八名のうち四名が既に内定し、五、九名が大学を受験します。

何かと先輩の皆様方にお世話をおかけすると思いますが、どうかよろしくお願いします。

（進学指導係記）

ご挨拶

同窓会長　大蔵治郎（T13卒）

昭和五十一年も余すところ一ヶ月となりました。一ヶ年という月日の短きを今更の如く思い知らされております。本年は政治、経済の何れも多事多難な年であり、一

部の特殊な業種を除けばお互いに重苦しい日々の積み重ねであったと思いますが会員の皆様には、これの難局を叡智と努力で乗り越えられ益々ご隆盛の御事と拝察致しております。

校以来、校長として母校へ就任されたは百年に華んとする永い期間中、今回で二人目であり、新学制実施以来、初めてのことであります。国府校長の手腕と活躍を期待して止みません。

昭和五十五年が津高創立百周年を行い、巷に多方面より資料の提供を願い保存することに依り貴重な資料の散逸を防止し、また事業の一環として津高百年史の編集、発行を学校、PTA、同窓会の三者が一体となり実施することに相成り、去る八月一日の同窓会総会に於ても承認を得た訳であります。

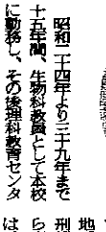
尚資金に関しましては、同窓会は一口金壱万円とし、なるべく一口以上のご協賛をお願いすることと但し年の若い会員については一杯のコーヒー代を節約してでもこの資金獲得運動に参加頂き、全会員の総力の結集によりこの世紀の事業成就をと念願する次第であります。微意お汲とりの上何とぞ宜しくご協力の程衷心よりお願い申し上げます。

終りに昭和五十一年が会員皆様がご健勝でご多幸の年となりますよう心から祈念してご挨拶と致します。

（昭和五一、十一、三〇）

ごあいさつ

津高等学校長　国府直美（S10卒）



昭和二十四年より三十九年まで十五年間、生物科教員として本校に勤務し、その後理科教育センターを始めとし各地を転々しましたが、本年四月より校長を拝命して再び本校に帰って参りました。顧みますと、昭和十年母校を卒業し教員の道を歩み歩んで参り、母校に奉職できますことは何よりも光栄と存じますと共に、その負荷の大きさに身のしまる思いが致しております。

昭和十年と申せば陳川五十一期でございますが、現在の新町の敷地では第一回の卒業となります。

刑部の旧校舎よりの移転で荷物や庭木の運搬に労力奉仕をした頃は、校庭は雑草が生い茂り蛇が棲機、周囲は貧民の田圃続きで経ヶ峯麓に負けじとボール蹴りで暇を取ったものでした。現在は西堀を民家に囲まれ何となく窮苦しく感じます。

昭和二十七年十二月の火災に際しましては、復興募金係を命ぜられ、同窓の皆様にはいろいろ厚く暖かいお願いをいたしましたが、その際の御協力にはいかに御礼申し上げます。復興成った現校舎は、同窓の皆様の御厚意の結果と申しましょう。先輩の苦心辛苦より来られた芸術大の先生が、風格を感じさせる校舎だ、と評されるのを承りまして、心ひそかにその由って来るところを自負致傷いたしました。

昭和五十一年三月の進学状況はかなり立派であったと評価できます。昭和五十一年三月は学校群制度下の最初の卒業生が出て参ります。その成績は県下にそぐって注目されております。県会としてどうか良い結果が出てほしいものと念じて居ります。本校としては従来に比して数が多少減じたのは当然といたしましても、能力意欲について今までと同じ生徒が沢山居ります。先輩に続けとばかり努力して居る様子が伺えます。これら後輩の進路について追っぺとなり、何かと御指導御鞭撻ありますようお願い申し上げます。

母校創立百年は昭和五十五年でございます。記念行事の構想もいろいろ練られては居りますが、その一つとしての記念誌発行についてきましても、格別の御協力を仰ぎたくしたいとよろしく御願い申し上げます。

折にふれ御叱声御指導ください

本年度総会のお知らせ

本年度津高同窓会総会は左記のように行われることになりましたのでお知らせします。議事終了後いくつかの会場にわかれて懇談会をもつことも考えられています。どうぞ多数ご来会ください。

一、日時　五十二年八月七日（第一日曜日）午後一時半より
一、場所　津商工会議所

なお三重桜部の総会はこれに先立って左記のように行われます。

一、日時　五十二年四月二十四日（日）十一時より
一、会場　三重県福祉会館（津駅東徒歩三分）

津高同窓会パリのつどい

―パリは快晴、ローマは春―

米本　宏（S4卒）

日本交通公社の肝入りで、津高同窓会パリのつどいが実現した。はじめての企画であり、参加者は四十六名、予想を大幅に下廻ったが、七十才を越したお年寄から卒業間もない若者まで、しかも女性が三分の二を占める異色の一行である。二月十四日、夜十時半、日本航空二四三便で羽田空港発、若さがはずみ、老がはなやぐ、アンカレッジ経由、北極のすぼらしさを満喫し、十時間時差の関係、朝ハンブルグ着、更にフランクフルトで乗り換え、午後、時過きにはパリのオルリー空港に無事着陸した。凱旋門、コンコルド広場、オペラ座、もうバスの窓からパリ見物である。中心街にあるアンバサダホテルで、長旅の疲れをいやしている年輩者をよそに、印象派美術館を見学したり、パリ街探訪に出かける者もいた。この日は午後七時から日本式レストラン「愛」で同窓会のつどい。参加者全員が自己紹介をし、日本料理に懐中食のあじけなさをしばし忘れ、歓談はつきそうにない。羽田では同窓会員というながら感じつつも、一つしっくりゆかなかった面々も、ここで感激対面し、利害アイアイ、なごやかなひとときを過ごし、津中、県女、津高の校歌を斉唱、津中の寮歌までが出て九時解散、帰り道、街頭に匂う焼栗をほおばる。

翌十六日には特別バスで市内観光に出かける。こんなことは珍しいというが、パリは快晴、気温も日本とかわりがない。ユーモアたっぷりのガイド氏に案内されて先ずノートルダム寺院に向う。絵葉書で見るのとはちがう、暗い寺内にれんぎょうの花がほのかに咲きにおっている。セーヌの流れに郷愁を感じ、ルーブルではモナリザに対面し、エッフェル塔を眺望に、パリの子供らと写真におさまり、すべてが楽しいその時その時の同窓会であった。冬のパリは寒かろうと尻込みされる人があるかもしれないが、ルーブルは見学者が少なく、どの絵の前、どの彫刻の前にも、じっと鑑賞できるのは、この時期以外にはないということである。青空の下、マロニエの街路樹も、しっとりした美しさをにじみ出し、「わび」「さび」のようなものを感じさせてくれもした。

夜はパリナイトツアーとしてリドで食事とショー見物。軽妙、酒豪、しかも感涙とした舞台はパリ観光の気分をいやが上にも盛りあがらせ、ホテルに帰ったのは翌朝の二時を過ぎていたろうか。

十七日午前はベルサイユ宮殿の見学である。パリの街といわず、ここの庭園といわず、いたるところ彫刻が多いのはおどろきであるが、宮殿の豪華さはそんなに目を楽しませ心をやわらげてくれるものでなく、個人的な好みからいえば、贅沢よりも反発さえ感じた。それよりも、午後のシャルトル大伽藍見学の方がはるかに心にしみた。パリから九十粁離れた小都市シャルトルは落付いた静かな田舎町で、観光地に多いというスリの心配もなく、ゆっくりと伽藍内の見学をでき、裏の公園から見下す町並は、ここなら住んでもみたいそんな感じを感じる。

夜は自由な食事の時間である。連れ立ってレストランにパリ料理を賞味するつもりであったが、エスカリエを、もうもう結構と尻込みする者、カキなど生貝に食傷し日本へ帰っても貝の顔は見たくない、いっそ地ビールにしようと一致したアン一匹腹わたぐくりしましたなあ。

そやけど此の頃の子供、でかいばかりで中味がのうなっとる、ちゅうのが多いですな。いや頭の中味ののうて、体の方ですがな。昔でも教育勅語の鼻すすり終えるまでに、千人の中に一人くらいはばはいた様に思うけど、今時の学校では運動会の最中に腰抜け皿を起すのがいますせ。あの「せいせいどうどう」って言う短いやつをひとこと言う間にひっくり返るんだから、血の回りが悪いとどころか呆きるんと違いますか。

戦争が終りに近づいた頃、健民修練所と言うのが出来て、目方や才の足りないのばかりを選んで、栄養塩と称して毎夏一ヶ月ほどの間、集って頂いた事がありました。

ヤギさん（林先生）の道場長、赤鬼（鈴地先生）の現場監督で、剣道場の床板――ほんとの板ですよ――に正坐させられて、のっぺりと顔の長い貴様の短歌とか言う、その頭みたいにのんびりと長い念仏みたいなのを合唱する間、ながながとお預けを食って、その挙句にやっと頂く晩餐の御献立は、毎日は定食でありましたので、昨日の事のように覚えて居りますが、だの、それで満腹から落ちて骨折たら、怒り集団で腸ネタルで裁判ですわな。

そんな食糧でもその頃の下宿の飯に比べたら、遥かに栄養学的なものでした。だから早く寄宿舎で空きっ腹をかかえている者は、栄養不良の中でも優先的に修練生として認可を受けたものでした。

そんなもん食って、やせっこけて、屁屑は稲刈りだの防空壕掘りだの、それで満腹から落ちて骨折ったなんて、聞いた事もなかったけどなあ。

今の栄養学に何か味があるのか食うたらあかんもんが食い物の中に入っとるのか、みんなが喜ぶように勉強のしすぎも緩解が足らんのか。

勉強と言えば言も結構勉強はしましたせ。もっとも三重一葉へ動員学徒になってからは、さっぱり縁が切れたけど。高校も国立校へ入って行く受験地獄の到合は、今は漫画など思いもよらぬ勉強でざった。夜半満天の星降る広い校庭に出て、経ヶ峰の稜線が眺める蒼茫の果てに、入るテもない高校の寮歌を高唱したのは、夢多い少年期の終章でありました。今でも風呂に入っては寮歌を唄い出す度に、それを教えてくれて一緒に歌った佐々木や高木・世古などの顔が目に浮びます。（裕明よ、生きとったとこれ読んで想い出してくれよ、銀漢遥ゆるオンカベの空を）

友達の顔に重なって浮んで来るのはやはり恩師の温容、今以って接するが如く、孔子さんの伊藤先生スミさんの吉田先生……きびしさの中にも人間的な思いやりで光ってましたなあ。

戦乱の雲乱れ飛ぶ中にも事がありましたせ。そこへ行くと今の学校は天平の中。この頃の子供は喧嘩もしませんなあ。学校へ行って見て、おウッやるぞやるぞと戦機熟した頃には、話し合いで。談合るでしょうが、べそをかいている親の子がそんな珍奇な人とも思えない。

「ほっときなよ、そんなもん」

「大丈夫かなあ」

「あしたになりゃ泣き止むさ」

「レントケンの写真とっとよ」

「記念写真か？」

ちょっと診りゃせこにもなったし、レントケン写真とっときゃもっと顔かったのに、と後で後悔しても始まりませんなあ。

明日になっても泣き止まないので「診療所じゃあかん」と、おっきな病院に連れてったら、すぐに写真をとってくれて、それが何とまあ骨にヒビが入っとったんやて。

親には恨まれるし、また誤診やとかうかわれるし、ほんまにひっくりしましたなあ。

戦中派の御挨拶

森田　功（S20卒）

ゆみ丸ごと、塩味に煮た菜っ葉でした。菜っ葉とは言っても、白菜の体菜ごと言う元もと葉を食うための菜っぱはなく、大根になる直前に間引かれた大根の葉の方でありました。

ですからと色の変る程に煮てはありますけども、葉裏にモゾモゾのトがまだ生えて居りまして、今の都会ならゴミ食わない、まして料理に学校の子供らに食わしたら、怒り集団で腸ネタルで裁判ですわな。

そんな食糧でもその頃の下宿の飯に比べたら、遥かに栄養学的なものでした。だから早く寄宿舎で空きっ腹をかかえている者は、栄養不良の中でも優先的に修練生として認可を受けたものでした。

そんなもん食って、やせっこけて、屁屑は稲刈りだの防空壕掘りだの、それで満腹から落ちて骨折ったなんて、聞いた事もなかったけどなあ。

今の栄養学に何か味があるのか食うたらあかんもんが食い物の中に入っとるのか、みんなが喜ぶように勉強のしすぎも緩解が足らんのか。

勉強と言えば言も結構勉強はしましたせ。もっとも三重一葉へ動員学徒になってからは、さっぱり縁が切れたけど。高校も国立校へ入って行く受験地獄の到合は、今は漫画など思いもよらぬ勉強でざった。夜半満天の星降る広い校庭に出て、経ヶ峰の稜線が眺める蒼茫の果てに、入るテもない高校の寮歌を高唱したのは、夢多い少年期の終章でありました。今でも風呂に入っては寮歌を唄い出す度に、それを教えてくれて一緒に歌った佐々木や高木・世古などの顔が目に浮びます。（裕明よ、生きとったとこれ読んで想い出してくれよ、銀漢遥ゆるオンカベの空を）

友達の顔に重なって浮んで来るのはやはり恩師の温容、今以って接するが如く、孔子さんの伊藤先生スミさんの吉田先生……きびしさの中にも人間的な思いやりで光ってましたなあ。

戦乱の雲乱れ飛ぶ中にも事がありましたせ。そこへ行くと今の学校は天平の中。この頃の子供は喧嘩もしませんなあ。学校へ行って見て、おウッやるぞやるぞと戦機熟した頃には、話し合いで。談合

渥りなくこの道を

―じょうずな字を求めて―

村田和子（S26卒）

第二次大戦が始まる頃、国民学校一年生には、一週間のうち、一～二時間の習字の授業があったように記憶している。ある日のことと、習字の成績「乙」の格印を押されて帰宅すると、明治生まれの両親は当時の教育パパであり、ママであったのだからたまらない。女の子で字が下手では、とんでもないことだ、ましてや、いわゆる達筆の持ち主でなかった両親にとって、自分達の轍を踏ましてはならぬと、日に一回位と記憶しているが、字のおけいこだった。今のように贅沢な使い捨て風に向かって量を廃ることから始まる。筆を摩りながら傍らに置かれたお手本の字をよくみて心を落ちつける。純白の紙上に筆をおろす時、どうかお手本のように、うまく書けますようにと緊張の極限に達する。少しでもお手本の観察が足らなくて線遠い字が出来ると修正されて、さあもう一度とかかなかお習字の時間から解放されない。

先人の美しい書をみて、形からくる整った字を書きたいな、じょうずな字として、美の基準が与えられた。少なくともそれが、終戦後まで続いた私達の美意識であった。この美意識の中で書かれる"字"は誤解されない。

戦後、毛筆は駆逐された。しかしあらゆる改革は、人間を解放し人間性が尊重され、平和は芸術の花を咲かせた。実用の"字"も、"字"を素材としての芸術"書"に昇華された。ペン軸とペン先はボールペンにとってかわり、複写技術は、今なお、ますます進歩して行く。昨今、再び書道ブームが続いていると聞く。実用面では、完全に価値をなくした毛筆が、ある面で静かに、もっぱらされ始めたのは、あながち、単に古きものを見直す流行のみとは思えない。何故なら、人と書の関係は、古くから人の心をうつし、時代の思潮をうつし、国民性をうつしてきた偉大な文化的遺産として日本人のなかに生き続けているからである。"あなたが、書をなさるようになった動機は何ですか"私にとって最も苦手な質問である。じょうずな字が書けるよう両親に強いられれば、いつの間にか習うことの苦痛から解放され、好きになったのではないかと、そんな風にしかいえない。考えてみれば、実生活で使う毛筆は慶弔ののし袋の表書き程度、それも今では便利な筆ペンがある。それでもなお、持ち馴れない筆をとって夜毎、机に向っているのは何の為なのだろうか。机の脇にも、いつも先人の法帖（王羲之、欧陽詢等）良、空海…）が置かれ、間単に私の眼に心に飛びこんでくる。これが私にとって最も偉大な教師である。じょうずな字を書く師である。じょうずな字を書きたくてこの道に入った方、先人の書の整った形を視覚にのみ探さないで、その人の人格、人間性、その時代の思潮、その人の生活環境、その人の生命力を感じ、その書をみても、同じように美しいと思われていたものが、その人その時代によって、様々の美が創り出され、人間存在の生命力を感じ、そこに温かい人間を感じ始めた。

筆者の第1回個展出品作（畔）

いたのが、次第に心に刻まれた冷たい感じから、脈々とした血の流れを感じ出し、時代の感をそなえ、そこに温かい人間を感じ始めた。

先人の書をみても、同じように美しいと思われていたものが、その人その時代によって、様々の美が創り出され、人間存在の生命力を感じ、そこに温かい人間を感じ始めた。

先人の書をみても、同じように美しいと思われていたものが、その人その時代によって、様々の美が創り出され、人間存在の生命力を感じ、そこに温かい人間を感じ始めた。

先人の書を学ぶ、が先人の書が、今なお、古典として書格を誇っているのは、その先人の人格からくる心の美しさが、永劫として生き続けているからである。じょうずな字が書きたいなら、美しい心を養わなければならない。字が上達すれば、少しでも美しい心が養われたのだとうれしい。私も美しくありたい。だから毎夜、白と黒の世界に没頭することができる。美を追求する余り、大胆にも、一回個展を開いた。技法は未熟でも、自分自身の書が、創りたかった。幸いにも、再度にわたり、大きな成果を得ることができた。そこには、同窓会長大藪氏を始めとした同窓の人々、職場の方々、その他沢山の周囲の美しい心の吹き寄せがあった。美しい心に触れ、いや増しに、美しきものを求める、求道の生活に、勇気が与えられた。

今年の冬、海のかなたアメリカで私の書が、他の人々と一緒に展示されようとしている。洋の東西を問わず、美しい心には変りがない。もし観る人の心に、胸に、響くものが、なければ、それは、私の、生活そのものへの批判である。もし幸いにして、そうでなければ今の生活態度に自信を持つことが出来よう。何れにせよ、美しいものを求めるが故に、私は書を追求し続けている。そして書はいつも私を浄化してくれる。

早く早く、本当にじょうずな字が書けるようになりたいと希いながら……。

母校の歴史 (11)

津田校長問題 ②

津中の巻

真弓六一 (S17)

さて参考まで掲表に提出教職員の職名、賞状、俸給などをあげると、校長の津田純一は大分県士族で資格は米国法律学士、俸給は月俸百円、教諭の村瀬光園は滋賀県平民で、東京大理学部卒業の理学士、月俸七十円、助教諭の小浜充次郎は三重県士族で英学を修業し、月俸二十八円、助教諭の林茂久次は滋賀県士族で、滋賀県師範学校国学専修科卒業の月俸二十円、助教諭の梅原三千は三重県士族で三重県師範学校卒業の月俸十五円、助教諭の岡島政平も本県士族で、本県師範学校を卒業し月俸十二円、雇教員の小島政亨は大阪府士族で、英学を修業し月俸十五円、雇教員の杉野一郎は三重県士族で、本県師範学校を卒業し月俸十二円、雇教員の小倉重一は千葉県士族で、東京師範学校を卒業し月俸二十円、雇教員の小島政亨は大阪府士族で、旧度会県師範学校を卒業に漢学を修業し、月俸二十円、雇教員の小倉重一は千葉県士族で、東京師範学校を卒業し月俸二十三円であった。

ところで前号で述べたような経緯で、明治二十二年一月、かねてから県当局との間に意志の疎通を欠いていた津田校長は、ついに教育論の根本的見解相違で衝突したのを契機に、決然と退職し、同志を盛いて津市寺町・上宮寺内に私塾「四州学館」を経営することになった。ちなみに四州とは伊勢、志摩、伊賀、牟婁の謂(いい)である。

ここでその辞表を掲げると、

辞職願

私儀中学校職員ノ職(ひ)免ノ儀ニ付キ、意見申請ニ及ビ候処、御採用不相成ニ付テハ黒白不相弁、職員ヲ務ベシ本校ノ秩序ヲ紊(ばん)回シ、教育其ノ宜(ぎ)ヲ得ルノ道無之候間、此上八一日タリトモ職任ヲ瀆(けが)シ、閣下ノ付託ニ負(そむ)キ候ハ、千万恐縮ニ至リニ堪(た)ヘズ候ニ付キ、職務御差免相成度ク、此段奉願上候也。

三重県尋常中学校長　津田純一

明治二十二年一月十六日

三重県知事　山崎直胤殿

というもので、これにつづいて助教諭の梅原三千、同・岡島安平、雇教員・小島政亨、書記・伊藤珍茂の四名が、一斉に辞表を提出したのであった。梅原の辞表は、職員組織二関シ校長ニ建議ニ及ビ候処、断然御採用不相成、悲キ敬来、然ル上八一日タリトモ、反対ノ精神ヲ抱(ほう)持セル職員ト同立致シ難キ儀ハ勿(もち)論ニ候、依テ謹ンデ職任御辞退申上候条、愚意御諒察被下、御解職相成ル様奉願上候　以上

三重県尋常中学校助教諭　梅原三千

明治二十二年一月十六日

三重県知事　山崎直胤殿

という内容で、他の三名の辞表も大同小異であった。

こうして津田校長の教育理論に賛同していた同校教員は、鈴木交茂ら三名を残して全員その挙に参加し、加えて津田に私淑していた上級学年生徒も、ほとんどこれに従う結果となり、県下有力者のなかにも賛意を表する者が現われた。このため同校の前途は危殆(たい)に陥ける様なり、その様相はあたかも明治十五年一月、山本栄吉事件の際と同様の状況となって、校内は混乱するばかりだった。

一方、県当局の狼狽(ろうばい)はなはだしく、速時の対処は不可能であり、混乱のまま事態を見送っていたが、ようやく二月六日になり、とりあえず教諭・黒川真登を、ついで四月七日、教諭・高島勝を校長心得に発令したのであった。

しかし、依然として生徒は一人も登校せず、ついに正式の校長職として大阪・第三高等中学校の清水誠吾が、四月二十九日、校長編託の職名で初登校した際にも、校内はガランとして、生徒の影は全く見られないという状況であった。

ところで、このように結束した行動の生徒指揮者が、後年千代田生命の重鎮として、関東財界に名の知られた堀井助一郎で、堀井はこの騒動の際、多くの生徒に推ぎ戴(ぎ)せられて隊長格となり、津田校長を擁護するとともに、四州学館開設に大きな働らきを示したのであった。堀井については後述のように四州学館が閉館になると、ただちに出京して慶応義塾に入り、家賃しいなかを苦学した。後年まで長く友人の結婚となったその家に、は、ある年出身地の伊賀上野に帰郷するに際し、旅費がなく、「書生歩き、そこの友人宅で金を借り帰津する有様だった。腹は減るし金はなし。決して愉快というものではなかった」と語っているが、これら七人は四州学館に参加せず、二十二年三月卒業した。ちなみに堀は帝大法科に進み、後年中学校長となった。また、東、千葉はともに帝大法科に入り、のち刑事となった。

さて、上宮寺内に誕生した四州学館は、館長に長井宗宅(うじよし)が就任し、津田はじめ村瀬らが授業を担当することになり、五月八日正式に発足した。ちなみに長井は館長就任前に県会議員であった経歴があり、のちに政友会所属の衆議院議員、津市長などを歴任した。この開館には当局をはじめ、反対側に立つ人々に反感悪い感じを抱かせたが、それを支持する人は快哉(さい)を叫ばせたのであった。当時開館にあたって来賓から寄せられた賀詞、祝辞には多くの津市民はじめ、心ある県民が賛意を表し、このため一時県下教育界の視線が同館に集まったのであった。そのため開館は早々から盛大な様相となり、当時小

洋服一点ばりであり、生徒にも後着のほかは、和服一枚持つことも禁制していたので、旅に着て行く和服がない。仕方がないため友人二、三人と寄宿舎を抜け出し、街に下宿していた友人のを借り着して出発した。それに文学とおりの赤毛布、草鞋(わらじ)ばきという出立ちで京都に向った。帰路も当時まだ珍らしい汽車で名古屋へ廻ったが、同地で旅費が全然なくなり、ついに名古屋から伊賀まで歩いて帰津する有様だった。腹は減るし金はなし。決して愉快というものではなかった」と語っているが、これら七人は四州学館に参加せず、二十二年三月卒業した。ちなみに堀は帝大法科に進み、後年中学校長となった。また、東、千葉はともに帝大法科に入り、のち刑事となった。

さて、上宮寺内に誕生した四州学館は、館長に長井宗宅(うじよし)が就任し、津田はじめ村瀬らが授業を担当することになり、五月八日正式に発足した。ちなみに長井は館長就任前に県会議員であった経歴があり、のちに政友会所属の衆議院議員、津市長などを歴任した。この開館には当局をはじめ、反対側に立つ人々に反感悪い感じを抱かせたが、それを支持する人は快哉(さい)を叫ばせたのであった。当時開館にあたって来賓から寄せられた賀詞、祝辞には多くの津市民はじめ、心ある県民が賛意を表し、このため一時県下教育界の視線が同館に集まったのであった。そのため開館は早々から盛大な様相となり、当時小

学校課程を修了して中学に入学しようとする希望者が多く同館の学籍簿に名を連ねる状況となった。このため同館教員らは、暴挙中学校を奏職した当時の決意を失うことなく、勇気凛凛(りんりん)として授業に励んだのであった。

ところで当時、県下に設立の私立学校は同館のみでなく、山田に津二四五市に桑名にと、その盛況と異なっていたが、その数は決して少なくなかった。しかし、その発足が県下百目の鉦(しょう)動を呼び、その設立が大賛成(ゆさ)であった点において、同館に優るものはなかった。このような状況のため津市民はもとより県民の多くが同館に関心を持ち、とくに教育関係者からは同館に対し種々の意見が寄せられた。

同館は発足に際し長井が館長になったのであるが、関係者は館長よりもむしろ館の教育に携わる人々に関心を寄せ、なかなか津田に対する意見が多かった。

例えばある教育関係者は、たとえ何なる事情があったにせよ、津田校長に対する義理から、寒に十人の教職員が奏職するとともに団結して一致した行動をとるにいたった経緯を考えると、そこには津田の人を包容する度量と、巧みという以外に言葉のない間合術があるとともに、教員らが自分自身を持するに高く、津田を信じて疑わない態度が見られる。加えて生徒の師恩を忘れない気風があり、その学には深く感動させられたのであるが、この点は津田という人物を深く知らない者でも認めるところであって、教員の奏職と生徒の退学が、果たして適理に合った行動か否かを判断できぬ者も一種の感嘆を発するほかないのである。以上の感懐は県下の心ある人々も同様の感想を持っているであろう、としたのであった。

また、ある教育者はわれわれは教育の改良、進歩を希求する者である。官立・私立の別なく、いやしくもわれわれが希望を満足させる内容であるならば、あくまでもその主旨に賛同し、その目的達成を応援することに些(いささか)も躊躇(ちゅうちょ)しない。今回の四州学館経営はその意味からして最善の挙である。しかし、同館設立が仮(かり)に津田はじめ諸氏一時の激高であって、いわば逆上的発生であるならば、われわれはその挙に賛成することはできない。何と言っても生徒はまだ無邪気である。その眼中にどうして官立・私立の区別があるだろうか。一途に多年の恩義を重い、自分たちの師に親しくする余り、父母の忠告あるにもかかわらず、いわゆる「大義親を滅する」感慨で、津田ら諸氏の袖(そで)に縋(すが)り行をともにしたのである。この状態を察せずして万一軽挙にも朝(あした)に館を創設し夕(ゆうべ)にこれを閉館するようなことがあれば、誠に不人情なことであるとも言えるであろう。

ところで、このように言っても同館諸氏はかりそめにも職を中学に奉じた人たちであり、高等の普通教育を生徒に学ばせようとする人士である。また、いずれも多少の事業を行った際に、現実の社会に経験のある有能者である。ことに津田は以前本県学務課長、県師範学校長という栄職まで兼務したほどの人物であるから、たとえ他の諸氏の性質、気質を知らないわれわれであっても、万一にも諸氏をいわゆる朝一暮四の軽挙な事業に同調させ、いたずらに県下の笑いを発行させるような事態に立ちいたらせることはないと信じるし、また、県下有志の盲目を騒動するようなことがあれば、館諸氏の不道徳、無人情は言うまでもなく、前途多望の生徒の不幸は、実に多大なものがあるものである。諸氏の明がこの理を知らないとは到底考えられないが、われわれは同館設立当初の経緯について、種々の悪評を聞いている現状から、些か不安を抱かざるを得ないのである。

実は聞き込みがあったからでなく、それ以前にわれわれは少しく疑いを持っていたのである。それは同館諸氏の今回の学校経営事業が、たとえ本県将来のためとして諸氏の本心により企画されたものであるとはいえ、同と言っても立派な学士をはじめ、その他有能な教師が、無給同様で奉職するのであり、そのうえ大部分の人が他府県出身であり、県出身者が少数であることである。

人間欲には無限である。如何に学士と言っても、また、如何に有能者といえども、あるいは如何に本県将来のためなりと申しても、何時までも人生無限の欲心を捨て骨折るということは、人間願望のなかで最も難儀なことである。会程の人物が特別の事情に制せられ、異常なほどの必要性を感得したのでなければ、到底成就し難い世間一般には知られていない。これを知らない世間の同館に賛辞するのは迂闊であり、諸氏の性向気質を知らないわれわれが、以上の点で疑念を持つのは納得できるであろう。

ところで、このように言っても同館諸氏はかりそめにも職を中学に奉じた人たちであり、高等の普通教育を生徒に学ばせようとする人士である。また、いずれも多少の事業を行った際に、現実の社会に経験のある有能者である。ことに津田は以前本県学務課長、県師範学校長という栄職まで兼務したほどの人物であるから、たとえ他の諸氏の性質、気質を知らないわれわれであっても、万一にも諸氏をいわゆる朝一暮四の軽挙な事業に同調させ、いたずらに県下の笑いを発行させるような事態に立ちいたらせることはないと信じるし、且出度、開館の盛典が挙行に

諸氏も種々の世評に迷わされ、折角の事業を中止するようなことはないと信じて疑わない。教師を信頼し組って来た生徒を振り乗て、就職口を他府県に求めるようなことは万々ないと信じており、わうなことはないと信じており、わずかな出来事から館内に騒擾(らん)を引き起こし、利害、欲得の暗闘が始まるようなことは、万一にも無いと信じている。と述べ、その開館を祝福したのであった。

同館の発足は以上の関係者発言からも察せられるように、幾多の困難、障害を排除して五月十一日授業を開始した。当日行われた開館式には多くの教育関係者が招かれ、盛大な式典が行われたのであったが、なかでも教職員代表・伊藤珍茂の演説は活潑にして雄大、そのため聴衆と館関係者の不退転の決意を感得したのであった。

このような発足から、従来同館関係者の人柄を知らなかった人たちにも、徐々にその人物が知られるようになり、館関係者が実行家であり、事業家であり、大望家であると認識するにいたった。そのため県下から同館発足に際し声援を送る者も多くなり、なかでも従来は、同館設立に批判的だった西濃会、すなわち県師範学校関係者も、全面的にその前途を祝福し激励した。ちなみに西濃会とは県師範学校卒業者が中心となり、結成の、教育的団体であり、県下に大きな発言権をもっていた。西濃会声援の内容は、同館関係者が今日の設立を見るまで、如何はかり経営上の苦心を重ねたことであろう。それは学事家の問題に、拡張計画の主旨に、種々の難問題が横たわっていたと考えられるが、これら困難を乗り越えられるか、この点われわれは関係者の忍耐心が肝要であったのに驚かされるのである。もし関係者に節操もなく、その脆薄なことあたかも水蒸気のようならば、恐らく現在の成果を見ることは未可能であっただろう。機運ここに一致し、県下有志の盲目を騒動するようにいたった所以(ゆえん)を考えるとき、有能な関係者、その関係者を熱って来館した誇り高い生徒諸君、そして同館関係者を信頼し、いわゆる衆一天度の気持ちで処した長井館長に対し、満腔(こう)の賛意を表せざるを得ないのである。「嗚呼、四州館生まれたり。声人は情挙す。唯(ただ)館が日に月に、光輝を喚(かん)発し、規模を宏遠にし、以て我県将来の元気を作興せんことを」と祝意を結んだのであった。

さて、このような状勢に対し県当局はどのような対判断と対策を用意していたのであろうか。当時県第一部学務課が、二十二年四月一日から同年九月三十日までの学事概要として県会に報告したところによると、まず校長、教員の更迭に関することは、出来尋常中学校生徒の養成法は、教年来の経験に徴し大改良が必要であると考えられていたその大要を報告したのであった。ところが、学校側の態度は県会の要望とはもとより、理事者(注・県当局)の考案とも一致する点がなかった。従って県では県会の世論と実際の状況とを勘案して、その目的を達成するため、商議会(注・協議会、委員会的性格の県・学校両者の会合組織)を設けたのであったが、この組織に関し二十二年一月、津田校長と教員は、数名を除いて過半数が反対し辞職するにいたった。その後県では県会議の精神に基づき、これに理事者が考える学校改革案を加えて、その概略を聴えることになり、二十二年四月、その企画がほぼ進捗されたのであった。すなわち教務と庶務に分担を設けて責任体制を明らかにし、生徒の取締り法では通学生で各所に散在し適宜宿泊している者は、これ等が多い現状からその宿舎を認めず、下宿の制度を設けて、とくに親戚などの要望する者以外は、全部従わせるとともに、下宿においても性行不良な者は寄宿舎に収容し、他の善良な生徒と起居を共にさせるようにした。また、校長の担当学科は修身科のみとし、専ら学校管理の校務を統括せしたのである。

ところが、今回の津田校長ならびに一連の教員更迭に関連して、この当初計画を中止せざるを得ない状況となったため、修身科は他教員に担当させ、校長には教務と校務、それに生徒係りの三名の分担者を置せる責務としたのであると述べた。

ちなみに同報告中に学校状況として、九月末の生徒数は一百九十五人で、このうち新入学は百八十二人、退学、死亡者六十六人、全科卒業者七人となっており、この退学者中にいわゆる津田問題で退学の五十人があった。また、死亡者は一名であり、全科卒業者七人のうち四人は、第三高等中学校に入学していた。その他進級状況を示されていたが、それによると、一級(五年生)二級(四年生)三級(三年生)にそれぞれ十五人が四級(二年生)に五十人が進級していた。

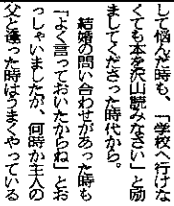
さて、以上のような経緯で発足した四州学館には、同館関係者が予想していた以上に、県下教育関係者はもちろん、一般からも好意的な声援が集まるとともに、数多くの生徒が入館したため、津田はじめ教員らは、その期待にゆうべ日々の授業に精励したのであった。上宮寺境内からもれる朗誦の声、教師の説明には、従来にない清新な気が満ちあふれていた。

ところが俄(にわか)ならぬ浮世の岸との響(ひびき)が聞こえてきたから、何時までも無邪気で勉強が出来可能であり、このことから同館教職員全員が緊張の身でなかった。

(つづく)

岩永先生を偲んで

橋口　怡子（S19卒）



晩夏の黄昏時、お宮の中はほの明るく、お背を拾うカサカサという音が何ともわびしく悲しく「先生お別れですね」と涙の誘れる思いでした。

先生には本当にいろいろお世話になりました。戦時下の軍山には心身共について行けず欠席ばかりして悩んだ時も、「学校へ行けなくても本を沢山読みなさい」と励ましてくださった時代から。

結婚の問い合わせがあった時も「よく言っておいたからね」とおっしゃいましたが、何時か主人の父と逢った時はうまくやっているのだろうかと本気で御心配戴いたそうです。男の意識に欠け物だったのでしょう。況して優秀な生徒ではありませんでしたから。

結婚といえば前の奥様を亡くされ、御不自由でお気の毒でした。夕方お菜等持って伺いますと、お台所で向かしていらっしゃいます「丁度いい所へ来てくれた。里芋の味噌汁が喉へなくて」とおっしゃるので見ますと、お豆腐と里芋が一緒に入っています。慌てて火をとめ大きく切ったお芋を別鍋で柔かくしてから、お豆腐と合わせて差しげた事がありました。

先輩の御物は又一入ひしく、斎藤豆、桑名卵など銘うってお喜びでした。

今の奥様とは四年程ですが、お料理上手でめきめきお元気になられ、松阪短大、津看護学校等いらしておいあわせでした。

卒業生から山の紅葉やらお茶席やらと御招待がありますと、運転手として御実家のお供をよくしたものです。先生は何よりも「心入り」を大切にされ手作りを第一とされました。

長女の結婚式には祖父一代に亘るエピソードを披露くださったり今思うには、お嫁さんなる前の一時の平安であったろうと思いますが、胃や目の大手術をされお苦かった晩年に、お優しい奥様を得られたことが一番あたたまる思い出です。

敬虔な、ヒュウマニティな御性格なりこそと、多くの卒業生の参列に唯ん頭を下げるばかりでした。

結婚してから……

大西　光子（S41卒）
（旧姓徳田）

東京に来てからもう丸四年間も過ぎてしまったなんて、全く時の流れの早さには怖しくなってしまいます。結婚して東京に住むようになった頃は、津の親しみあふれる言葉やのんびりした気分、そして新鮮な海の幸や、恋だしのお味噌汁などが恋しくてたまらない時がありました。生まれてから結婚するまで、学生時代のわずかな期間を除いては、津を離れたことのなかった私です。東京の町の中であの白と緑の三重交通の観光バスを見つけた時は、まるで親しい人に会ったような気がしたものでした。

結婚するまでは一度もお勧めをしたことがなかったのですが、仕事を持たないと毎日を逆歩なおくるようで気がして、結婚後三カ月目に就職試験を受けました。公立図書館の司書の資格を持っていたので、ぜひそれを生かして図書館に勤めたいと希望していましたが、けれども、どうしたらそんな仕事を見つけられるのかサッパリわからなかったのです。新聞の求人欄にたまたま見つけた「お茶の水図書館」の募集に、夫に内緒で応募してみました。受験者は百二十名位あり、唯一名しか採用しないというので、半分あきらめて行ってみたところ、私の後にもぞくぞくと受験者がおいでになるのには驚きました。それに、お茶の水図書館についての何の予備知識もなしに出かけてみて、びっくりしました。この図書館は男ではだめ、一つしかない女性のための（もちろん男性は入館できません）図書館であり、有料であり、主婦の友社初代社長が作ったものだというのです。

試験問題は、B四の大きさにキッシリ三枚で、内一枚は全て数学的問題、そして作文を書かされました。私は、高校卒業以来数学なんて全くやったこともないし、学生らしい人が多数を占めていたのでやっぱり無理だと思っていました。ところが、運良く一次試験に合格の通知が来て、今度は面接試験です。大きい試験の壁側に一列にズラリと並んだ試験官、その前におずおずと座った私に一人一人質問を浴びせられました。仕事に対する情熱や、人間としての使命感、女性としての生き方等について、意見らしいものをはっきり持っていなかった私は、大それたことを言えるわけもなく、マイペースでしか答えられませんでした。でも、一次面接も何とか通ったらしく、二次・三次面接をパスして、一月の終りに結果通知が届いた時は、夫と共に大喜びしました。

けれども、採用になったのは図書館ではなく、主婦の友社の事業部だったのです。後で考えてみると、面接の席に試験官の顔ぶれが変ってきていたことに気がつきました。一体、出版社の事業部なんてまた仕事をするんだろう、まして、どうして私がそんな部門に行くことになったのかと半信半疑でした。

の初出勤は、結婚五カ月目でした。私が事業部に廻された理由は持ち前の好奇心から何でもやってみようというなんなこと（茶の湯・生け花・書道・日本画・七宝焼・洋裁・車の運転等）を経験していたからということでした。そして事業部の仕事とは、「主婦の友」の読者サービスとして、本で紹介した内容を実際にその道の先生が読者に伝えるための取りつぎでした。実際の仕事としては、各種習熟の講師との連絡やお世話をしたり、お料理講習の際の助手役でした。

私の所属する部門は、部長をはじめ、副部長、課長以上三十名が全員女性というユニークな職場です。平均年令が三十才、その三分の二が未婚であるというのも、やはり東京という環境のせいだからかもしれません。週に一、二度は残業あり、既婚者にとっては多少大変な時もありますが、その内容が多方面にわたるので、何かを勉強するには良い職場だと思うようになりました。それまで私もいろいろな事に首を突っ込みましたが、お料理だけは一度も習ったことがありませんでした。それゆえに、担当が回ってくればまず原稿を書き、そのお料理の先生の助手として大勢の人前で動かなければならないのです。その度肉を焼んだりしてみるとおもしろいし、何より自分の勉強になるのです。今では仕事をしながら自分も成長できて良かったと思っています。ただ、会員のかたが実習中に「先生」と呼びかける時には、背筋がくすぐったい思いです。

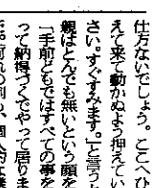
こうして仕事を持ってから、もう三年半になりました。結婚前には一度も勤めたことがないのに、結婚してからはじめて仕事を持ち曲がりなりにも一人の社会人として働いている自分が、時々不思議な気もします。でも、もちろん、自分のためにも良かったと思っています。もし、一度も世間に出ることなく、家庭の主婦としてだけの生活しか知らなかったら、とてもつまらない人生になってしまいそうな気がするからです。世の中には経験してみて、はじめてわかることが多いように思うし、仕事を持たなければ知らずにいたであろうこともたくさんありました。

私の場合は、夫が勉強中で、仕事を持っていないこともあって、協力してくれるので何とか続けてこられたのです。いつまで、どこまでやれるかわからないけれども、今は結婚してからでも、自分を勉強することなく、やりたいことはできるだけやるべきだ、やろうと努力することだと思います。

後輩の林田美（旧姓野田）さんも、同じ職場に来てもう一年半になりました。二人で、よく津高時代のことや津の話をしてなつかしがっています。そして、故郷があるのはありがたいと言いあっている今日この頃です。

common sense

葛山　輝清（S16卒）



common sense という言葉を繰り返し繰り返し、津中で教えて下さったのは、下河辺副先生でありました。休み時間などに、私達に「コモンセンス」「コモンセンス」と言い合っていたものの、common sense の本当の意味を考えてはいなかったように思う。京都へ出て、所謂自様生活を送るようになると、春と秋には、ストームと称して、市電をも留めてしまう騒ぎを起こしながら、教室には、やはり、きびしく common sense なるものを教えられた。

common sense とは、単に「常識」なると言うと、少し違ったニュアンスもあろうかと思われるが、一般的には、所謂「常識」そのものと考えてよかろう。

診察室に三才ぐらいの子供を椅子に掛けさせたまま、知らぬ間に突立っている母親に、「早く衣服を脱がせなさい。」と言うと、「いえ、この子はもう自分でちゃんと出来るんですよ。○○ちゃん、さあ、お洋服を脱いでおボンボンを先生に見せてあげてね」。同じく六才くらいの子供を掛けさせた彼の真裸を公衆の面前に病状を訴なる。「△△ちゃん、もう何もかも丸裸になって、診察室に入りなさい。」と言うと、「そんなことを言い合っていても仕方ないでしょう。ここへひっ抱えて来て動かぬよう押えていて下さい。すぐすむんです。」と言うと、母親はとんでも無いという顔をして「手前どもでは手すべての事を居合って納得ずくでやって居りますので。」何れの例も、個人的な我の固執で、診察室というような公共的色彩の強い場所へ持込まれる問題ではないのです。それは各々の御家庭でということで結着をつける。

診察時間外の優しいブザーの音に飛び出してゆくと、犬に咬まれたとの事。赤チンを塗って終り。傷の人は狂犬病の予防注射は受けてある旨伝えると、咬まれた方は「狂犬病は大丈夫ですか。」と心配そうである。

昔ッ犬によく咬まれたものだが、赤チンなどを自分で塗って済ませた。もとより医学的知識あっての上ではないが、犬に咬まれることと、狂犬病とは別のことであるくらいの「常識」があった。昔より知識レベルは遥かに向上しているのに「常識」的なことのみ後退してゆくように思えるのは不思議である。

また、新聞記事で、有名犬が人を咬んだという記事にも触れない。「尚この犬には狂犬病の予防注射は受けてあった。なお、必ず噛かれている犬が人を咬んだ事件とその犬の狂犬病予防接種との間隔が全く別である。狂犬病の犬に咬まれぬ限り、人間の狂犬病は絶対に起らない。又、現在日本で狂犬はゼロである。

幼児教育が「常識」に関係すること大と思われるので、幼児教育科での学生に対する講義では、幼児の「社会性の欠」について、くどくどと説いている。育児書のバク博士の育児書」（一筆の手帖社発行）の原著名は「The Common Sense Book of Baby and Child care」となっている。

欧米の幼児教育は非常に厳しく「してはいけない。」という禁止の命令に理由は不三されない。「してはいけない。」のである。ヨーロッパの母親達はストーブを触れても火傷しなと、ストーブを触れても火傷しない程度まで暖めて火を消し、子供を傍へ連れて行き、わざと子供の手をストーブへ押しつけるそうである。かくして、ストーブは熱いものと知った子供は絶対にストーブには近づかない。幼い子供を火傷から守るための配慮である。

育児のようで育児ノイローゼなる言葉さえあり、大変むつかしいもののように考えられている。が要は common sense であって スポック博士も「自然に振舞え」と述べている。子供は母親のヒステリーを見て、気分がモヤモヤしたときにはヒステリーを起してもよいことを知る。ヒステリーを起さず、じっと自を殺して辛抱している母親を見ると、感情は殺さねばならぬと思い込み実行する。これが積り積って遂には爆発すれば大変なことさえ起るようになる。余りむつかしく考えず、common sense で良いのである。

欧米では午後八時になって子供が寝室へ行こうとしないと、父親は子供を叱ッと怒れ、いかに泣きわめこうが知らぬ顔で寝室へ運んでゆく。我が国では、住宅事情や住宅構造が異るから同一には論じられぬが、たとえ出来なくとも気持だけはこの気持を持ってほしいものである。

最近では下熱剤の注射の代りに坐薬がよく用いられ、for adult のものまで輸入されている。痛みは無く効果は注射に近く、しかも家庭で行うことが出来るから子供にとっては便利である。所がこれを「子供が嫌がるので」と家庭で使わない親が意外に多い。押えつけてでも簡単に入れられるものであるが、「入れさせませんので」と子供の我侵を許し、平気な親が多いのである。

「危険と思い強力争ったのですが、子供がどうしても聞き入れませんので、仕方なく黙り与えたオートバイなのですが」という話を耳にすると、幼い間チヤホヤと我侵を許し、後になって親の言うことに従えといっても それは無理であろう。common sense なるブレーキが無いのである。幼児の間に厳しく社会性の躾をするということは、common sense が育ってゆくための最初のステップのように思われる。

大谷大学教授（幼児教育科）・開業医

「住井先生」と独のでつぶやく

「住井先生」と独のでつぶやくと、私の心中では極めて自然に「いろいろお世話になりました」という言葉が湧き上ります。

先生と始めて親しくしていただいたのは、昭和二十二年末に私が津高の教員として久居の兵舎跡に赴任した時だったと思います。教員経歴も殆んどなく大阪から来たこんなような私に、時間割の見方、出席簿のつけ方、教室の位置など全く親切に教えて下さいました。

しかし何よりも大きな感銘をうけ今もなお心の中に残っているのは、先生の日常生活です。今への誠実そのものが先生といってもよいでしょう。それは授業に対しては勿論ですが生徒の生活指導、学校の内外を問わず又きびしい時もやさしい時も、我々がいわゆる雑務と称するような事に至るまで真心を処理されていたと思います。

又授業に対する情熱は大変なものだったようです。夕方おそくまで、授業に用いられるプリントの準備に、タイプをたたいて居られた姿、又その高度に徹底した内容、テキストの下調べの徹底的な研究、生徒に意欲を起させる小テストの数々、又その添削等全く一分のすきも感じさせない日常でした。こんな立派な先生と同じ学校につとめられるとは……というのが当時の私の偽らざる心境でした。解らないことばかりの私は何でも井先生に質問しました。御自身には厳しい先生ですが極めて寛大な心をお持ちで、どんな事でも出来る限りの援助を持って教えて下さることがその場限りのことではなく

て無来も必ったような風に、私もこんな教師になれたらなあと思いました。そして現在もその気持に変りありません。だ残念ながらその千分の一にもなれない現実ですが。

とたが住井先生にはもう一面さったりしたものです。その後娘が津高の入試を受ける日が来たのですが、慣例によって私も当日入試にはノータッチで試験場付近へは近寄れなかったのです。お屋の休憩時間中に突然住井先生が私たちの部屋へ入って来られ「○○ちゃんはニコニコして部屋で友達としゃべってましたよ」とのこと。わざ娘の居る部屋付近を通ってそれとなく見て来て下さったことが後でわかりました。本当に嬉しい本当にありがたいことと感激しました。私事にわたることを述べて失礼しましたが、又先生はお家で読書の合間にテレビを御覧になることもあったらしく、「一緒に食事でもしたよう時にはタレントの口まね等でも出ることもありました。学究的な先生の口から出ると余計に面白く先生共々大笑いすることが時々でした。又相撲は大好きのようで特に柏鵬（春日野親方）にはなかなかの力のいれようでした。出羽錦も面白い力士だと言って居られたことを覚えています。その頃は私も瞬の席で大分相撲に明るくなったような気がしました。

先生と共に過ごした十数年の思い出は次から次へとつきることがありません。

住井先生が亡くなられたことは今こうしてペンを走らせている時でもとても信じられません。しかしあの御葬儀のあった日のことを考えますとどうしようもない事実です。やっぱり悲しい現実です。

先生から今まで御教示いただいた数々のことを肝に銘じて教員生活にはげむのがせめてもの御恩返しと思っています。

先生の御冥福をお祈り申し上げます。

×　×　合掌

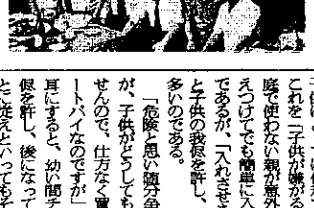
陳川甲子会

（大正十三年卒）

陳川甲子会（大正十三年卒）では一昨年本卒業五十年の催しを湯の山山上ホテルで開いて以来、毎年必ず一回は開く事となっている。同期会も前回の幹事が発病の為のびのびになっていましたが遂石効なく去る六月三十日なくなりました。彼は津中・津高の同窓会には終始皆勤を折った男で惜しい人をなくした事を残念と思うと共に彼の冥福を祈りたいと思います。

そんな事で本年度の同期会を七月十八日に福島会を津市寺町天然寺本堂に新旧名を加えた五十二名の物故者の法要を営みました。

また午後三時より懇親会を津市浜田幸楽、福本満



出席者
岩崎昭寛、杉谷宮司、大藪治郎、金子安雄、西村誠、長谷川昌二、長谷川芳郎、吉村英一、吉村圭右、沢野敏郎、長谷川正巳、加藤昌夫、水谷常太郎、天野敬二、宮原恒男、浜田幸雄、福本満

（金子・安雄記）

旧師短信

今回は特に、ずっと以前に本校をお辞めになった、しかも、それぞれの時期における卒業生にとり、とりわけお馴染み深く忘れがたき次の諸先生よりのご短信を掲載させて戴くことにいたしました。これら諸恩師の心温まる懐かしいお便りに厚くお礼申し上げますと共に、お年と共に益々の尊きご活動とご健康とご多幸とを心からお祈り申し上げる次第でございます。

名簿発行に感謝

真弓　清右衛門（M44卒）

（大正15年―昭和21年津中勤務）

新しい同窓会名簿を拝見し、素晴らしいデラックス版と一驚すると同時に編集に当られた諸君のご労苦に敬意を表した次第であります。往時、津中在職時、昭和五年、十一年、十六年の三回、名簿を西、五名の母校出身校内幹事だけで、夏休みを返上し、編集に取り組んだ思い出が浮んで参りました。特に十六年には応召最後の繰出で、焦燥に駆られた際に、編集内容が、会員の要望により、本籍、現住地、出身学校、級学校勤務先を掲載するため、当時、寺田、米本、後藤の諸兄と共にあの当直室で行なうことになって頑張り続けた追憶が髣髴としてくるのです。

新名簿で感じたことは、何と死者の名字の多いこと、そこで、死者の住所（黄泉だから当然かも知れないが）が取り除かれており、この原稿の打合せのため久しぶりに津高をたずねました。なつかしさのあまり運動場に立って、あれは昭和九年四月古河の校舎から引越し開校、現在のような大規模もなく、手で引くローラーで整地をしたのでした。神戸の南の丘から運んだ岩石が教室に敷いてあったのでびっくりして、おまけにその荒地に住みついた蛇たちが冬眠からさめて見ると生徒達が待ちかまえているのでした。

懐かしい蛇取り講義

藤原　淳一

新学期早々の体操の時間には一列横隊で分散した生徒はさめて出て来る蛇捕りの時間です。

「蛇が穴に返えす前に尾をとらえてゆっくりゆるめて油断をさせ、さっと引出せ、咬まれないように首根っこをつかまえろ」先ずこんな講義からはじめて時間の終りにはそのあわれな蛇達を殺さないように教室東南の岩田川まで捨てにいったものでした。

その年寒出伊倉津の旧家小林家の母屋に住みついた蛇が、一列横隊で分散した生徒達を追っかけ廻して来る蛇捕りに、先ずこんな講義からはじめて時間の終りにはそのあわれな蛇達を殺さないように教室東南の岩田川まで捨てにいったものでした。

その年寒出伊倉津の旧家小林家の母屋に住みついた蛇が、一列横隊で分散した生徒達を追っかけ廻して来る蛇捕りに、先ずこんな講義からはじめて時間の終りにはそのあわれな蛇達を殺さないように教室東南の岩田川まで捨てにいったものでした。

投稿の条件が短信、六百字以内となっているので、名簿に関する感謝と、往時の追憶のみで申訳ありません。母校の隆昌と同窓諸賢の御多幸を祈念して擱筆します。

遺族の方が見られても寂しく思われるでしょうし、現存者が遺族に連絡したとても不明なのが千慮の一失に思われましたが最早六百字の字数制限の為、故人の

三重桜部だより

今村　房（T12卒）

昭和五十一年の総会は、ちょうど学校創立記念日にあたる四月廿五日にいたしました。場所は樽原の樽原館で、新校長国府先生を迎えし、同窓会からは阿部副会長が出席されました。それにいつもお元気な高畑先生が遠路岡山からおいでくださいました。旧師立松先生岩水先生、本城先生、長瀬先生、伊達先生、別所先生もご出席下さって、錦上更に花を加え、会員は百六十名を超す盛会となり、大広間も廊下へはみ出すほどになりました。

三重桜同窓会（於・樽原館）

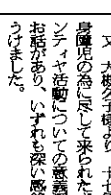
なつかしい三重桜の校歌を合唱し、先生方のご近況をうけたまわり、思い出の校舎を津高へ移してはどうかというご意見も出て、今後の津高の発展につれて三重桜も咲きにおうばかりに鼓舞をいただきました。中食後は温泉につかり、かくし芸を披露したり、時間のたつのも忘れ、最後に次回を約して散会いたしました。

尚この会にご出席下さいました岩水先生がこのあとご病気で八月三十日ご他界なさいましたことは幾重にもお悔やみ申し上げます。来年からの同窓会には先生のお姿が見られないとは何と淋しいことでしょう。かえりみますと私は昭和四年以来ご一緒にいつしょに勤めて参りました。津高合併のことも先生と私と二人だけは津高に残されて、ご指導をいただきました。皆様と共にご冥福をお祈りいたします。

三重桜東京部会だより

天野　清子（S　3）

昭和五十一年十月八日、三重桜東京部会を番町共済会館で開催致しました。今回は今村先生も御出席願ますず、又在京の会員にも差支え多く、出席者三十七名でございましたが、多数の時には見られぬ親しさのこもった集まりでした。自己紹介を通り一巡のなく委しく語っていただいたのが親密度を増すのに役立ったようです。



今年八月に出版された外地引揚者の体験記「凍土からの声」というお本がラジオ、テレビ、新聞に大きく反響を呼んだのを覚えていられる方も多いと思いますが、三人の主婦が、終戦後三年にしてはじめて広く引揚の記録をつづり一冊にまとめられたものなのです。

その三人の中の一人が同窓の田沢志保様でしたので、出版されるまでの御苦心の程を伺って聞かせていただきました。

又、大槻久子様より、十七年間身障児の為に尽して来られたボランティア活動についての意義深いお話があり、いずれも深い感銘をうけました。

その後、伴安農様の詩吟の美声にうっとりして和かな雰囲気になりました。

どかくクラス会は楽しいけれど同窓会はと、敬遠されることもなきにしもあらずで、如何にして同窓会を魅力的な集まりにするかが伝統ある三重桜の大木です。どうか、年毎に美しい花を咲かせつづけたいものと心より希っております。

色濃しや三重の桜の返り花

陳川同釜会の集い

森田　利一（T12）

正午から、津市丸の内中華楼で開催した。

当日の出席者は下記十一名で、その内、菊沢季生氏（T9卒）及び斎藤千秋氏（T9卒）の二名は初参加であったので、お互に名前を思い出す事の出来ない人が多数いた。

昨年の例会以後に物故せられた若林緑天氏（T9卒）、森田慶三氏（T14卒）のご冥福を祈った後、寒に移った。

一回中華料理に舌鼓を打ち、盃を交わしながら、懐しい昔話に花を咲かせたのであるが、その内容なものは次の通りである。

(1) 大正八年、三重一中が津中に改称された当時、深夜数人の生徒により、門柱にかけられた表札の墨痕鮮かな「津中」の文字が、「三中」に書き換えられた事件があり、しかも二回程繰り返された事件に関し、あるクラス会の席上、犯人の一人が六十年近く前の悪事（いたずら）を自ら白状したそうであるが、その内容は百六十名の校歌を合唱し、先生方のご近況をうけたまわり、思い出の校舎を津高へ移してはどうかというご意見も出て、今後の津高の発展につれて三重桜も咲きにおうばかりに鼓舞をいただきました。中食後は温泉につかり、かくし芸を披露したり、時間のたつのも忘れ、最後に次回を約して散会いたしました。

尚この会にご出席下さいました岩水先生がこのあとご病気で八月三十日ご他界なさいましたことは幾重にもお悔やみ申し上げます。来年からの同窓会には先生のお姿が見られないとは何と淋しいことでしょう。かえりみますと私は昭和四年以来ご一緒にいつしょに勤めて参りました。津高合併のことも先生と私と二人だけは津高に残されて、ご指導をいただきました。皆様と共にご冥福をお祈りいたします。

津高東京同窓会総会報告

昭和五十一年度、津高東京同窓会第十四回総会は、去る九月十四日に開催されました。

敬老の日を明日に控えたこの日台風十七号の余波が降らせた大雨も跡形なく晴れ上った夕刻七時半より、場所はいつもと少し趣きを変えて、ブラックスムードの漂う京王プラザホテルにて。

今回は新会長の木村俊夫氏が御多忙の中を出席されることもあって、出席者百名に上る盛況でありました。

津の本部より大藪会長、阿部副会長、母校より国府校長、長谷川先生、若林先生をお迎えして華やかに和気藹々裡に開会されました。

第一部次大会、北川事務局長の開会の辞につづき木村会長の挨拶、流石に洗練されたダンディな会長、一言々々が魅力的です。

来賓として大藪会長の御挨拶、いつも精力的で全く同窓会長としてうってつけの方だと思います。大名演説行の御苦心、頭が下るばかりです。

国府校長には初めてお目にかかりました。

お父上の国府先生には、五十年の昔、国語を教えていただきましたが飾らぬ素朴なお人柄、恰幅のおそろしいところなどそっくり。

御一族全部が津中、津高女の純血を誇られる先生の誠意ある御挨拶に感動致しました。

第二部にうつり、衆議院議員、元外務大臣としての木村会長の特別講演「政局と日本の外交」折しも内閣改造が刻々進行している最中として二人に興味深く拝聴致しました。

何れも派閥にも偏されず、自由な立場から、透徹した眼で将来を見通され、自民党の脱皮を要望される真摯な講演に一同深い感銘を受けました。

つづいてこの一年間に逝去された、元会長浦生氏他の物故会員の御冥福を祈り、一同起立して黙禱。

両北川の一人、北川智一氏司会で和やかな懇親会となり、本年東京の大学へ進学された優秀な三人の新会員の紹介等があり、生悦住卯会長の乾杯につづいて、賑かな歓談の発声で誠に二重桜、昭和三年卒、津高、四年卒のグループが再会の喜びの昔話に名残りを惜しんでおられました。

尚、次回第十一回総会は、明五十一年十一月十三日（日）午前十時から、場所は同じく阪神百貨店九階グリーンルームで開催されることに決定しましたので、会員各位には今から日程に組入れていただき、多数出席下さるようお願いいたします。又クラス会も兼ねていただけると思いますので同級の方々、是非誘い合わせて出席されるようお願いします。

最後に、本総会に当り事務局としてお話いただいた会計の廣村幹事（S・20卒）鈴木勝巳氏（S・29卒）に厚く御礼申上げます。

水谷　次男（S・24卒）記

津高大阪同窓会総会報告

津高大阪同窓会第十回総会は、去る十一月十四日午前十一時より本部から大藪会長、阿部、今村両副会長、母校から国府校長先生、市川先生を迎えて、おなじみ梅田阪神百貨店グリーンルームにて開催されました。前夜からの雨に参加者の出足が危ぶまれましたが、それも幹事の杞憂にすぎず、参加者数は約倍数の一二〇名に達し、開会に先立ち撮影した記念写真も男女二組に分けなければ納まらないという盛況でした。特に今年も十名を超える学生会員を含む約四十名の津高卒のヤングの参加があり若さの漲ぎる会となりました。

会の冒頭、野田会長（M・42卒）から辞意が表明され、発足以来十年間御世話いただいた御苦労に一同感謝の拍手を贈り、ついで新会長に野崎幹事長（T・10卒）新幹事長に小津幹事（S・7卒）の両氏が選出されました。新会長、新幹事長共、その挨拶の中で、同窓会発展のため、若いセネレーションの参加、協力を強調されました。

大藪会長から同窓会名簿作成の苦心談、創立百年記念行事予定など、本部の動きを伺った後、野田会長の音頭で乾杯を行い、懇親会に入りました。懇親会では、まず同窓生の校長先生としては最古参二人目という国府校長先生から、全国ベストテンに入る大学合格者数を誇る進学状況や、総合選抜制の現状などを伺い、また和田大先輩（M・44年）から津高の考名さを大阪の人から聞かされた経験談を伺い、母校の活躍ぶりを嬉しく感じました。

ビールが飛び交わされるにつれ各テーブルの歓談も酣となり、今年も七名の参加という四十九年卒のヤングによるフォークソングに始まって、明治の大先輩の洒脱中派の意気軒昂な歌と楽しい交歓が繰りひろげられました。

今村副会長から三重桜同窓会の近況報告の後、津高女校歌の合唱に続いて、津中、津校の校歌が会場に響きわたり、午後三時前、大歓会長の発声で誠に二唱して散会しました。散会後も二重桜、昭和三年卒、津高、四年卒のグループは、なおも昔話に名残りを惜しんでおられました。

尚、次回第十一回総会は、明五十一年十一月十三日（日）午前十時から、場所は同じく阪神百貨店九階グリーンルームで開催されることに決定しましたので、会員各位には今から日程に組入れていただき、多数出席下さるようお願いいたします。又クラス会も兼ねていただけると思いますので同級の方々、是非誘い合わせて出席されるようお願いします。

最後に、本総会に当り事務局としてお話いただいた会計の廣村幹事（S・20卒）鈴木勝巳氏（S・29卒）に厚く御礼申上げます。

水谷　次男（S・24卒）記

京都支部だより

同窓会の京都支部では毎年新春の懇親会と、秋に総会を開くのを常とし、その前に随時幹事会をもつのを例としているが、新春懇親会は年末、年始の会が重なることの為、その前に鴨川の畔の料亭で開催、出席者二十四名、半年ぶりに顔を合した。会員は後の三時間を歓談し午後三時ご解散した。

総会は月二十二日午前十一時下鴨礼の森生研会館にて開催、本部からは大藪会長、国府校長以下五名、遠路わざわざ御出席を賜った。会員の出席は二十五名であった。

例の如く岩田幹事より事業報告会計報告があり幹事を終り、今年は戦後同窓会の部が結成されて十年に当るので、何か記念の事業をと幹事の方々で相談ともちったが、いろいろ検討の結果、会員の方からその専門の仕事に関する

〃同窓会会員名簿をみての雑感〃

斉藤　剛（S18卒）

卒業以来三十数年を過ぎた今日まで、同窓会と同期会を混同して位置づけているような私に、突然岩崎正博君（私共、S18会幹事）から、母校の名簿作成の為の原稿用紙を前につづく考えさせられてしまいました。

百年の歴史の重みと、二万七千人の同窓名、数多くの業績を残された諸先輩、縦横無尽に活躍中の皆様の手元に配布される同窓会報にと思うと筆の進みも遅々としましたが、年齢的にも、卒業と数において既に過半に達しているとの責任感から、思いつくままに、この雑文を寄せさせて頂く次第です。

晩秋の日曜日、妻も子等も出払ってしまった家の内で、過日御配布頂いた津高同窓会会員名簿を懐しく拝見している中に次の様な数字の遊びを致しました。

私共が卒業した S18と二十年後の S38卒業生の其の後の情況をたて氏名、住所、職業とから推察して次のような表を作ってみました。

下の表をながめながら思い浮かぶまゝを綴ってみました。

奇跡とまで云われた第二次大戦後の日本の復興と経済成長発展を背負った世代の人の経済成長の情況が我が同窓生においてどのように変化したか。

S18卒業生が官公庁、教職、医師の道に数多く進まれたのは、戦後の混乱期に国家、地方における復興の行政の為、秩序の回復、次代を背負う子弟の教育、健康による人々を必要としたことを示し、かゝる基盤によって育まれた人材が（S38）次々と世に送られたことを表している。特に工業関係に従事する人の数が S18と S38で二十年間に約倍増している（16%→30%）ことに辛っては今日までの我が国経済発展と今後の安定成長に大きく寄与する人的構成を示すものと思われます。

	S18	S38
全卒業生数	208人	529人
勤務先記載数（死亡者を除く）	184人 100%	298人 100%
官公庁（公社、国鉄を含む）	28人 15%	38人 13%
医　師	15人 8%	15人 5%
教　職　者	32人 17%	42人 14%
工業に従事する人	31人 16%	90人 30%
(鉄鋼、金属、冶金に従事する人)	(1 0.5%)	(5人1.7%)
三重県外に在住する人 死亡、不明を除く	63人 38%	106人 34%

一方三重県外在住者数を比較すると（年齢的要因、その他要因があるとは思うが）S18とS38では、その差に大きなひらきが無く、むしろS18の方が数%大きいことは意外でした。これは中部工業地帯の一環として三重県の工業化が大きく進んだことを意味するのではないでしょうか。

私事に亡渡って恐縮ですが、私の勤務先として居ります日本鋼管も津市に造船所をつくり、津高同窓関係者の絶大な御尽力と御支援のもとに今日立派に業績を上げております。前表中にカッコして入れた数字が示す如く極めて淋しく思われたのは S18で、鉄鋼、金属、冶金に従事しているのは私一人であったことです。勿論、津高と鉄鋼業を結びつける何ものかを探しても困難かもしれない、三重県下と拡げても僅かに数多の鋼物工業が頭に浮ぶ程度であります。

私は学校を出てすぐ日本鋼管に入社し、以来二十五年鉄鋼業拡張飛躍の中で仕事をして来ました。

鉄は国家なり

鉄は工業の米であると云われる如く、まさしく鉄鋼業は、国の基幹産業であり、工業の基礎であります。

敗戦によって壊滅的打撃を受けた日本鉄鋼業は、工業立国、輸出立国を唱えるに木死鳥の如く飛躍した日本工業を支える基盤として絶々しくも、華々しくも立ち今や年間一億三千万屯に達する生産を行い、かつての鉄鋼国であった英、独、仏の生産量をはるかに凌駕し、米ソについで世界第三位の鉄鋼国となり、直接、間接の鉄鋼輸出は我が国経済を支え、又世界における鉄鋼供給国として絶対の足場を確保しております。

かって私共が若い時代に鉄鋼業の先生として欧米を視察しましたが、その先進性の導入に努めましたが、今や立場は逆転し、欧州諸国は勿論、米国、ソ連にも数多くの技術輸出を行うようになっています。

過日、英国鉄鋼会員、鉄鋼小委員のメンバーを御迎えし、色々討論が行われました。現在、日本は英国鉄鋼と比較し、生産性は2.5～3倍です。

勿論復興期における国家、政府の指導、援助と、さらに経営者諸先輩の先見性、英断もさることながら鉄鋼業に従事している労働者、日本国民の勤勉さ、目的への努力、拡大への意欲、そして、さらに大きいのは日本人の教育水準の高さであるとの結論でした。

今後の日本がいかに経済成長抑制時代に入るとしても、又より高度な技術を要求される機械工業コンピューター、電子工業等の部門が表面に出てくる時代になろうともやはり鉄鋼、金属、冶金工業は、その基礎であり米の飯であることには変りがないと考えます。

どうか我が津高同窓生の一人でも多くが鉄鋼冶金関業に従事されることを祈って筆を折ります。